

命に向き合う移住の日々

「地域の困り事を恵みに変えたい」

朝7時。イノシシが箱わなに
入ったと連絡を受けた井上拓哉さ
んは足早に里山へ向かった。

「ガシャーン、ガシャーン。」

山裾にけたたましい音が鳴り響
く。警戒心の強いイノシシは威嚇
する。捕獲の師、山本哲彦さんと
手早く打ち合わせを済ませると、
静かに電気銃を手取る。数秒後、
イノシシはそっと横たわった。

その後は、次の捕獲準備に入る。
静寂の中、シャベルで落ち葉を
集める音だけが響いていた――。

人生を変えた10万円

井上さんは、情報通信技術を活
用してイノシシによる農作物被害
から地域を守る「くまもと☆農家
ハンター」の一員。三角町の農家
と連携し、増えすぎたイノシシを
捕獲し食害から作物を守っている。

生まれ育ったのは水と緑に恵ま
れた千葉県野田市。幼い頃から動
物が大好きで、犬や文鳥、ウーパ
ルーパーなど飼ってきたペットは
数知れず。生き物をこよなく愛す
る少年は成長とともに農業に興味
を抱くようになり、農大へ進学す
る。その講義の中で、野生鳥獣に
よる食害が深刻化し、離農が増え



宇輝人

VOL.55

井上さんは、「来たのは勢いだ
けです。会社もない。何を担当す
るのかも分からない。分かっている
のは被害と向き合うことだけ。
やるのが明確になった今でも不
安ですよ。」と、言葉とは反対に
あっけらかんと笑う。

昨年10月には、自身も建設に携
わった戸馳島の食肉加工施設「ジ
ビエファーム」の施設長に24歳で
就任。新たに加わった仲間と共に
食肉加工だけでなく、革で小物を
作り、骨や赤身はペットフードや
堆肥に変え、大事な命を余すこと
なく使い切るために日々奔走する。

葛藤と目標の間で奮闘

宮川さんは「捕獲に対する世間
の理解も増し、活動も見えるよう
になって少し安心しました。施設
や仲間を支えていて立派です。で
も多忙なので体が心配。精神的に
もつらい面が多くあると思いま
す。」と胸中を吐露する。

「工場建設のことを考えていた
ら、今度は食肉加工のこと。次は
食肉の流通やマネジメント……。必
死に突っ走っています。今は商品
からイノシシによる被害のことを
知ってもらうために、安全で喜ば

れるイノシシ肉を提供できるよう
になりたい。やることは多いです
が挑戦することが楽しいです。」

しかし、駆除には常に葛藤がつ
きまとう。
「命を奪っていいのだろうか。
これは人間の都合ではないのか。
農地を守ることは果たして正しい
のだろうか――。」

考え出したらきりがない。
それでも、被害をなくするため、
そして、この活動を全国に広げる
ためにがむしゃらに動き回る。

ミカン農家の稲葉正二さんは、
「地域のために頑張ってくれてい
ます。畑を守るためとはいえ、命
をいただくのはとても心苦しい。
彼らが私たちと共に捕獲し、命を
全て活用してくれるので、精神的
に楽になりました。」と話す。

地域と共に取り組む活動だから
こそ、奮闘する。
「最終的には人間と動物の住み
分けができて、この活動をしなく
ても良くなるのがゴール。皆さん
が安心して農業を営むことができ
る地域を実現したいです。」

屈託のない笑みを浮かべる彼の
目は、持続可能な地域とその未来
を見据えている。

井上 拓哉 Inoue Takuya

平成7年生まれ。千葉県出身、三
角町戸馳島在住。東京農業大学卒。
20歳で狩猟免許を取得。捕獲し
たイノシシの食品加工施設ジビエ
ファーム(株式会社イノP)の施
設長。イノPは地域・コミュニ
ティーづくりで2019年度グッ
ドデザイン賞を受賞。趣味は絵を
描くことで、高校生国際美術展で
入賞するほどの腕前。



INOUE's GOAL

- 1  山でイノシシが暮らす
- 2  里で人が暮らす
- 3  ジビエ加工が不要になる
- 4  野生動物の被害による離農・耕作放棄地ゼロ